

「日向湊……？あ、やっぱりあの日向だ」

外注先のエンジニアリストを眺めていた私は、見覚えのある名前に目を止めた。

日向湊——前の会社で一緒だった、無愛想な社内S E。整った顔立ちで一部の女子社員には騒がれていたが、話しかけても「……ああ」「……別に」しか返さないし、表情も変わらないし、正直何を考えてるかわからなかった。

でも仕事は抜群にできるし、納期もちゃんと守ってくれる。一期、私はそんな彼のお世話係みたいになっていたこともある。

（……仕事以外ポンコツすぎて、放っておけなかったのよね）

昼休みにカップ麺ばかり食べてるのを見かけたから「ちゃんと食べなよ」ってランチに誘い出したり、仕事に熱中しすぎて終電逃しそうになってたらタクシー呼んであげたり——そんな感じで、お

節介な先輩ムーブをしていた記憶が蘇ってくる。

「日向、フリーランスになってたんだ」

二年前に退職したって聞いた時は驚いたけど、確かに組織向きじゃなさそうだったもんな。

ポートフォリオを見ると、実績もしっかりある。技術力は確かだし、単価も相場の範囲内。今回のプロジェクト、ちょうどエンジニアが足りなくて困ってたところだ。

懐かしさ半分、実務面半分で、私は日向にメッセージを送った。

三日後、打ち合わせで私は日向と再会した。

駅近くのカフェ。約束の時間ぴったりに現れた日向は、相変わら

ず整った容姿をしていたが——記憶に変わらず無表情なのがなんだか懐かしかった。

「久しぶり、日向」

「……久しぶり」

黒い髪はちよつと伸びて、くしゃつとした感じになってる。黒のカットソーにデニム、とかなりの軽装。

（……でも、飾り気のない格好なのに、様になるんだよね）

昔からそうだった。何着てもイケメンなのに、本人は全くアドバンテージだとは思っていないのだ。

「元氣だった？ フリーランスになったんだって？」

「……ああ」

「ちゃんと食べてる？ 不摂生してない？」

「……普通」

「普通って何。カップ麺ばっか食べてない？」

「……最近は自炊してる」

「え、日向が？すごいじゃん、成長したね！」

「……別に」

相変わらず返事は素っ気ないが、私は気にせず仕事の話を始めた。プロジェクトの概要、必要な技術、納期、報酬など、日向はずっと黙って聞いていた。あまりに無反応で不安に駆られていたが、話し終えると一言「……やる」と返事をくれた。ほっと胸を撫で下ろす。

「ほんと？ありがとう、助かる！」

「……ああ」

日向は相変わらず表情を変えなかったけど、なんとなく、前よりも表情が柔らかくなった気がする。——気のせいかもしれないけど。それから、日向とは週に一、二回顔を合わせるようになった。

基本はオンラインでやり取りするんだけど、資料の受け渡しとか、細かい仕様の確認とかで、直接会った方が早いことも多かった。

そのたびに、私は昔の癖が抜けなくて、つい世話を焼いてしまう。

「日向、これ差し入れ。コンビニ寄ったから」

「……ありがとう」

「ちゃんと寝てる？ 目の下、ちょっとクマできてない？」

「……寝てる」

「嘘でしょ。何時に寝た？」

「……四時」

「四時！？ 何してたの？」

「……ゲームの新作」

「もう！ちゃんと寝ないとダメだよ！」

「……………」

「健康管理も仕事のうちだからね!？」

日向は面倒くさそうな顔をするけど、差し入れは毎回ちゃんと受け取るし、私の小言も一応聞いてくれる。

昔からそうだった。口では「別に」とか「うるさい」とか言うくせに、最後まで人の話はちゃんと聞いてくれるんだ。

「……世話好き……」

「え？」

「あんた、昔から世話好きなの」

珍しく日向から話題を振ってくる。お節介すぎて文句を言われているのかと思ったけど、日向の顔を見るとそうでないことが分かる。単に疑問に思ったから聞いている感じ。

「うーん……どうだろ。あ、でも、社会人になってこんなに世話やいたの日向くらいかも」

「俺だけ……」

（日向って、なんか放っておけないタイプなんだよね）

「だから、転職した後も気にしてたんだよ？」

ちやんとご飯食べてるかなあ……なんて。同い年の男にそんなことを思ってる時点でたいぶ失礼な話なんだけど。

日向は、黙って私のことをじっと見つめている。

「日向……？」

「……俺も、あんたのこと忘れたことなかった」

「え？」

一瞬、ドキッとしてしまったけど、日向のことだからそんなに深い意味はないんだろう。

「あ、ありがとう……？」

そう返すと、日向は少しだけ表情が柔らかくなった。

その日から、業務以外でも日向と連絡を取ることが増えた。

『ロコモコ作った』『部屋掃除した』

そんなメッセージと一緒に、写真が送られてきたり。

『もう寝る。おやすみ』

寝る直前に、そんなメッセージが届いたり。

(……これは、ちゃんと生活できますアピールなのか?)

日向の突然の変化に私は戸惑いを隠せない。けれど、そんな不器用なコミュニケーションも、嫌だと思っていない自分がいた。

そんなよく分からないやり取りが続いたある日、カフェでの打ち合わせの後に日向が言った。

「……前言ってた契約書類、できたから取りに来て」

「え、郵送してくれればいいのに」

「……めんどい」

「もう！私に手間かけさせるのはいいわけ？」

「……じゃあ、送る」

「はあ……今から会社戻って打ち合わせあるから、仕事終わりに寄るね」

「……いいのか」

「いいよ。納期とか無理言ってる部分もあるし」

そう言っ、私たちは一旦別れた。

会社での打ち合わせが長引いてしまい、結局日向の家に向かったのはかなり遅い時間になってしまった。

付き合いだけは長い割に、日向の家に行くのは初めてだった。どんな部屋に住んでるんだろう。やっぱり殺風景なのかな。カップ麺が積み上がってたりして。

そんなことを考えながら、私は仕事を終えて日向のマンションに

向かった。

インターホンを押すと、すぐにドアが開いた。玄関先で書類だけ受け取って帰るつもりが、「どうぞ」と中に促されてしまった。

「お、お邪魔しまーす……？」

少しだけ戸惑いながら中に入ると、思ったより片付いていた。

（掃除してますアピールも嘘じゃなかったのね……）

最低限の家具しかないけど、ゴミが散らかってるわけでもないし、清潔感もある。

大きなデスクにモニターが三台並んでいて、いかにもエンジニアの部屋って感じだ。

「意外とちゃんとしてるじゃん」

「……意外って何」

「いや、もつとこう、カップ麺タワーとかあるかと」

「……タワー？何それ」

「ま、自炊してるって言ってたもんね」

「……肉じゃが……」

「ん？」

「肉じゃが……作った」

「へえ！ほんとに毎日自炊してるんだ！」

「あんたに」

「へ？」

一瞬、言われている意味が分からなかった。

「私に……肉じゃがを？」

「ああ。……食べる？」

頭にクエスチョンマークがたくさん浮かぶ。肉じゃがを作りすぎてしまったから、食べて欲しいということだろうか。日向はいつも説明不足で、よく分からない。けれど、肉じゃがと聞いて、仕事あがりの私のお腹はキュルル……と切ない音を鳴らしている。

「……いたでこうかな」

せっかくなので、ご相伴に預かることにした。

日向の肉じゃがは驚くほど美味しかった。じゃがいもにもしっかりと出汁が染み込んでいて、私が適当に作る料理なんかの何倍も手間暇かけているのが分かった。

食後のデザートまでいただいたところで、私は自分がここに何しに来たのかを思い出した。

「……ああ。ちよっと待ってて」

日向はデスクの引き出しからファイルを取って、私に差し出した。

「……これ」

「ありがと。じゃあ私、そろそろ帰る——」

「待って」

腕を掴まれた。なんだろうと振り向いた瞬間、唐突に唇を塞がれた。

「んっ……!!?」

何が起こったのか、理解が追いつかない。日向の顔が近い。

（……というか、キスされてる……? え、え、なんで?）

「ちょ、日向……っ」

「……」

唇が離れても、日向は何も言わない。ただ、じっと私を見ている。いつもの無表情なのに、目の奥だけがやけに熱い。

「え、なに、なんで……」

「……」

腕を掴む日向の手に力が入る。

「ちよっと、説明……んっ」

また唇を塞がれた。今度は深く、舌が入ってくる。

じゅるっ♡

「んむっ……♡」

日向の腕が腰に回って、引き寄せられる。抵抗しようとしたけど、思ったより力が強くて、動けない。

（え、ちよっと待って。なに、どういうこと？ 日向が、私に、キスしてる……？）

頭がぐるぐるする。息が苦しい。なのに——口内で舌をやさしく吸い上げられ、背筋がぞくりとする。

「んー……ん、んう……」

れろれろお……と、上顎を舐められたら、お腹の奥がきゅっとな
って――

「……っぷは」

ようやく唇が離れて、私は息を吸った。日向は相変わらず無表情
で、でも耳がほんの少し赤くなってる。

「……ちよつと待って……」

「……何」

「何じゃなくて……なんで、キスするの!？」

「……したかったから」

「は……? 何それ、したかったからって……」

日向は私の顔をじつと見て、それから少し首を傾げた。

「……嫌？」

そう問いかけられて、私は思わず真剣に考える。さっき、日向に口内を好きにされた時、嫌というよりはむしろ――

「い、嫌ってわけじゃないけど……」

しまった――と思った時にはもう遅かった。日向がまた顔を近づけてくる。

「……嫌じゃないんだろ」

「だ、だからって……!」

日向がまたキスしてきた。今度は優しく、ちゅつと唇を重ねるだけ。

「……わっ!」

そのまま、近くにあったソファに押し倒された。

「ちょ、待っ……」

「……やだ」

「やだって……何言って……」

日向の手が、私の服の裾に滑り込んできた。

「っ……ちよつと……」

「……触りたい」

「触りたいって……ん♡」

お腹をさわさわと撫でられて、思わず声が出た。ひんやりした指先が、肌の上を滑っていく。

「や……っ、くすぐりたい……っ」

「……ここは？」

指が上がってきて、ブラの下のラインをなぞった。

「っ……」

そんなんで、許可を取ったつもりらしい。日向はそのままブラを押し上げて、直接胸に触れてきた。

「あっ……♡」

「……柔らかい」

ふにっ♡ふにっ♡

揉まれる力はそんなに強くはない。確かめるみたいに、指全部を使つてくにくにと揉み込まれる。

「んう~~~~……っ♡」

「……おっぱい揉まれるの好きなの」

「す、すきなんかじゃ……っ♡」

っん♡

指先が乳首に触れる。くりゅ、くりゅと、親指と人差し指に挟まれて、やさしく擦られる。

「ひっ……♡」

「……乳首は好きみたいだな」

ぴんっ♡くり……くりくりっ♡♡

「あっ♡んっ……♡♡」

「……気持ちいいの？」

「……っ♡♡」

否定できない。さっきから、乳首を指で弾かれたり転がされたりする度に、身体の奥がキュンと反応してしまってる。

（やばい、なにこれ……日向、経験少なそうなのに……なんでこんな手慣れて……）

きゅっ♡ぐにっ♡♡

「ああっ♡やっ……♡♡」

両方の乳首を同時に弄られて、思考が溶けていく。

「ひ、日向あ……っ」

「……脱がせたい」

「え……っ」

日向が私の上着を脱がせにかかった。抵抗する間もなく、ブラも一緒に外されて、おっぱいがぷるんと日向の前に曝け出された。

「やっ……恥ずかしい……」

「……なんで……こんな綺麗なのに」

「っ……」

真顔で見つめられると、余計に恥ずかしい。腕で胸を隠そうとしたら、手首を掴まれた。

「……隠すなって」

「だって……」

「……乳首ツンツてなっててかわいい……」

その言い方、ずるい。心臓がどきくと跳ねる。腕の力を抜いた瞬間、日向の顔が胸に埋まってきた。

「ひゃっ……♡♡」

はむっ♡

「っ……日向、それ……っ」

舌先でチロチロと乳首を舐め上げ、飴玉みたいに転がす。温かくて、湿っていて、さっきの指とは全く違う刺激。

「あっ♡んっ、やっ、んう~~~~♡♡」

ぢゅぢゅっ♡♡

強く吸われて、腰がびくんと跳ねた。

「んっ……♡♡あっ、そこ、そんな、吸わないでえ……っ」

「……なんで」

「だってえ……なんか変なのお……っ♡♡」

「……変？」

「お腹の奥が……キュンって……♡♡」

「よく分かんないけど……気持ちいいってこと？」

ちゅ、ちゅ、ちゅ♡♡れろれろお……♡♡

日向は無表情のまま、黙々と乳首を吸い続ける。片方を舐めながら、もう片方は指でころころと弄って。

「あっ♡ん……っ、や、う……やあっ……♡♡」

(やばい、胸だけで、こんな……)

「日向……っ♡」

「……ねえ。下も、触っていい？」

直球すぎる質問に、顔が熱くなる。

「……っ」

答えてないのに、日向の手がスカートの裾に伸びた。

「あっ……」

スカートをたくし上げられて、下着が露わになる。

「やっ……み、見ないで……」

日向の目が、私の下半身に向けられた。

「……すごい濡れてる……下着透けてる……」

「っ……言わないでよ……」

くちゅ♡

下着の上から、指が押し当てられた。

「ひっ……♡」

「……ここ、熱くなってる」

「ああっ♡だめ……っ♡♡」

くちゅ……♡くちゅくちゅ……♡♡

下着越しに、指がクリ周辺を擦ってくる。水音が部屋に響いて、恥ずかしすぎて死にたくなる。

「……直接……触りたい……」

「……っ♡♡」

「……いい？」

ダメって言っても全然やめてくれないくせに。黙り込んでいるうちに、日向の指が下着の中に滑り込んできた。

「ひぁっ……♡♡」

「……すごい、ぬるぬるしてる」

「やっ……言わないで……っ♡」

「……中からとろおって、溢れてくる……気持ちいいの？」

指が割れ目から溢れ出る蜜をすくうようになぞっていく。ゆっくり、丁寧に。

「ん~~~~……っ、日向ぁ……♡♡」

「……女の子ってここが一番気持ちいいってほんと？」

っんっ♡♡

一番敏感な場所に触れられて、腰が跳ねた。

「ひあっ♡♡」

「……へえ。ほんとなんだ」

くちゅくちゅ♡くりゅくりゅ♡♡

日向の親指が、クリトリスをくるくると転がし始める。淡々と、一定のリズムで与えられる刺激に、ぴくっぴくっとな体が跳ねてしまふ。

「やっ♡そこお……あっ、くりくりするの……んんっ、だめえ

……っ♡♡」

「……だめじゃない。ほら、どんどん溢れてきて、下着の意味なくなってる……漏らしたみたい……」

「ひどい……っ、だめ、って、それ、やらあ……っ♡♡ う〜〜

……っ、ひなたあ……とめてえ……？♡♡」

「……やだ」

ぐちゅ♡♡くりくり♡♡

指の動きが速くなる。水音もどんどん大きくなって、頭がぼうつとしてくる。

ふいに、日向は擦る指の動きを止めると、私の足元に跪いた。

「え、ちよつと……なに……？」

無言のまま手が伸びてきて、抵抗する間もなく、濡れそぼった下着を一気に剥ぎ取られた。急に剥き出しにされた下半身に部屋の内んやりとした空気が触れ、思わず太ももを閉じようとするが、日向の大きな手が内腿をがっしりとホールドしてそれを許さない。

「やつ……そんなとこ、見ないでえ……っ」

「……俺の指でこんな濡らして……興奮する」

普段の仕事と全く変わらない平坦な声。けれど、私を見上げる

その黒い瞳の奥には、隠しきれない仄暗い熱が渦巻いていた。そのまま、日向の端正な顔が、無理やり開かせた私の脚の間にゆっくりと降りてくる。

「ちよつと、何して……」

「……ここ、舐めたい」

「な、舐めるって……っ」

ぺろ……ぺろ……♡

「ひあっ……!!?♡♡」

直後、びくつと腰が大きく跳ねた。先程までの長い指先とは全く違う、温かくて、柔らかくて、圧倒的に生々しい粘膜の感触。

「やっ……日向、そこ、きたな……っ♡♡」

れろ♡ちゅる♡♡

私の抗議など聞こえていないかのように、日向が黙々と舐め始め

た。あの無愛想でクールな日向が、私の股間に顔を埋めて一心不乱に蜜を吸っているという強烈な視覚的背徳感に、頭の芯が真っ白になる。顔はいつもの無表情のままなのに、舌の動きは異様なまでに丁寧だ。とろとろに蕩けた蜜を掬い取るように、ゆっくりと割れ目の襷をなぞり、下から上へとじっくり辿っていく。

「あっ！？♡んう、ひう……んん~~~~……ッ♡♡」

（な、なんで、こんな上手いのよお……っ）

ちゆる♡♡じゆる♡♡

一番敏感な場所にはわざと触れず、舌の平らな部分で周りだけをくるくる、くるくると焦らすように舐め回される。逃げようと身を振っても、太ももを掴む男の強い力がそれを許さない。そのじつとりとした執拗な責めに、お腹の奥が熱を帯びてきゅんきゅんと疼き始めた。

「んあっ♡な、なんか……うう~~~~♡……あっ、あんっ♡♡」

「……腰、動いてる」

「だってえ……じらすから……っ♡♡まわりばっかあ……♡♡」

「……クリ、舐めて欲しい？」

「……ひっ……！？♡」

ぴんっ、と、硬い指の腹でクリトリスの芯の部分を弾かれた。まるで電流が走ったかのように、腰がびくつと大きく跳ね上がり、ソファのカバーを掴む手にぎゅっと力が入る。

「……どうする？」

日向は顔を上げないまま、上目遣いで私を見据え、れろお……と、クリトリスの包皮に触れるか触れないかくらいの絶妙なラインに舌を這わせてくる。

れろお……れろお……♡

「ひうう~~~~~……♡もお、むりい……んんっ、ひなたあ……お願い、ちゃんと、クリ……なめてえ……?♡♡」

「……っ、そっちが言ったんだからな……」

ぢゅるる♡♡

皮ごと舌先で力強く押し上げられ、最も敏感な先端がむき出しにされる。期待にぷくら膨らんだそこを——日向はちろちろと舌の先で細かくつつきながら、唇全体を使ってじゅぽっと啜り上げた。

「ひあっ!?♡♡ああっ、クリ……あっ、じんじんするよお……」

っ♡♡

舌の腹でべろんと下から分厚く舐め上げて、先端の一番敏感な芯の部分がちゅぷっと音を立てて吸い付く。ちゅう、ちゅう、と甘くしゃぶられるたび、脳髓が痺れ、膝がガクガクと小刻みに震え出した。

「んあっ!?!♡ひう……んうう……♡♡おつ、しよれえ、らめえ……っ♡♡」

「……ダメって、ここ、吸うたびに中からはどんどん溢れてきてるけど」

決して乱暴で激しいわけじゃない。日向の舐め方は、正確に一番気持ちいい場所のど真ん中を捉えていて、逃げようとする腰をがちりホールドしたまま、快感の種を体内に蓄積させていくような緻密な責めだった。

ぢゅるる♡♡ちゅぱ♡♡ちゅぱっ♡♡

ぢゅぢゅぢゅうう♡♡♡♡

「ああっ!?!♡ひぎい……、やつ、やばっ……しよれ、クリ

……とれちゃ……っ♡♡」

芯のところだけをピンポイントで強く吸い上げられ、全身の毛穴

がぶわっと開くような強烈な痺れが走る。

「んあああおあ~~~~~……♡♡」

「……んー、これ、コロコロしてて……このままずっと舐めてられる」

「……もっ、やめ……っ♡♡」

「自分で押し付けてるのに？」

否定できなかった。恥ずかしいのに、止めないでほしい。もっと激しく舐めてほしい。そう主張するように、私は無意識のうちに腰を浮かせて、自ら卑猥な蜜を垂らす秘部を日向の顔へと押し付けてしまっていた。

ちゅるるっ♡♡ちゅぱ♡♡ちゅぱっ♡♡

ちゅちゅちゅちゅうううッ♡♡♡

舐め上げるスピードが一段階上がり、ずずずず~~~~~……と強い吸

引力で吸い込まれる。

「んあああっ~~~~♡♡♡つよっ、日向、しよれえ……んあ♡♡♡お
っおっおっ♡♡♡きもちいいの、とまんな……っ♡♡♡」

「……いきそう？」

「んん~~~~…♡♡♡はあ……んうう……ひ、なたあ……っ♡
♡」

ぢゅううッ♡♡♡

今までで一番強く、限界まで吸い上げられた。パンパンに充血した先端を舌先でチロチロと激しく弾きながら、ぎゅうつと唇全体で強く吸い込まれる。

「ああっ!?!♡♡♡ひい♡~~~~…っ♡♡♡き、ちやう……いく

……いぐ……あっあ♡♡♡」

ソファのカバーを握りしめ、なんとか快感を逃がそうとするけれ

ど、もはや手遅れだった。膝がガクガクと痙攣し、背筋がくの字に反り返る。自分の意思とは無関係に、秘部を日向の顔にこれでもかと曝け出してしまふ。

「ひ あ あ あ つ ♡ ♡ どん う ー ツ ツ ♡ ♡ ♡ イ ツ — ♡ ♡ ♡」

「あああ♡♡♡ん♡♡♡お♡♡♡ツ♡♡♡」
ううう♡♡♡ツ♡♡♡

びく っ♡♡♡
びく っ♡♡♡

日向の執拗な舌の動きだけで、何も考えられないほどの絶頂に導かれてしまった。

「はっ……はぁ……っ♡♡」

余韻で身体がびくびくと震えている。頭がぼうつとして、指先まで痺れている。なのに――日向の舌が、まだ動いている。

「っ……♡♡ちよっとお……!?!い、いまあ……いった、ばっかあ……っ♡♡」

「……知ってる」

「知ってるなら……っ♡♡」

「……全然足りない」

「……は？」

「蕩けそうな顔でイってんの……もう一回見たい」

「な、なに言って……ちよ、やだって、ひう!？」

制止の声は届いているのに、もう舌が動いてる。いったばかりでぐじゅぐじゅになっている秘部を、舌全体を使ってれろお……れろお……と舐め回している。

「ひぎいっ!?!♡♡んぐう~~~~……ら、らめえ……もおむりだつてえ……」

「……嘘。言いながら腰揺れてる……もつと欲しいんだろ」

「ち、ちが……っ♡♡」

違うと言いながらも、日向の舌の動きに合わせてるように、また腰を動かしている自分に気が付いた。

（……気持ち良すぎて……苦しいくらいなのに……なんで……）

ぢゆるぢゆるぢゅううう……♡♡♡

れろれろれろお……♡♡

いった直後で感度が跳ね上がって、同じ刺激なのに受ける快感がさつきと全然違う。腰が勝手にびくびく跳ねてしまう。

「……んー……舐めにくい」

私が腰をクネクネさせるせいで思うように舐められなくなった日向は、私の両脚を腰を浮かせながら持ち上げると、ぐっと肩の方まで抑えつけて、秘部を自身の目の前に露わにさせた。

「ひい！やらあ……この体勢恥ずかし……っ」

「……こうすると中までよく見える……」

くぱあ……と膣口を曝け出すみたいに日向の指で広げられる。

「やめてってばあ……！♡」

「……見てるだけで、ヒクヒクしてる。あ、ほら。また溢れてきた

……」

そう言って、日向は膣口に舌を挿じ込んだ。

「ひあっ！？♡♡」

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

舌を出し入れしながら、溢れてきた愛液を溢さないように啜っている。

じゅるるる♡♡♡じゅる……じゅる……♡♡

「やっ♡んう……、舌、なか……舐め……っ♡♡」

ぬちゅ♡♡ぬぽっ♡♡じゅるるっ♡♡

奥の壁を舌尖でぐりぐりと撫で回されて、膝がかくかく震えてくるけれど、この体勢じゃ快感をうまく逃がせない。脚を押さえつけられて、折り畳まれて、執拗に舌を出し入れされる。

「んっ♡♡やあぁっ♡♡舌、抜いてよぉ……っ♡♡」

そう言いながらも、ぐちゅ……ぐちゅ……と、日向の舌の動きに合わせて水音が響いている。私が感じているのは明白だった。

「……いった後だから……すっごい量……」

「あっ、だってえ……日向が、いっぱい、舐めるからあっ♡♡」

「やめて欲しいの？でも、あんたの中、きゅうって締め付けて離してくれないし」

じゅるるるっ♡♡ぬちゅぬちゅ♡♡ぬちゅぬちゅ♡♡

舌が中をかき回すリズムに少しずつ体が慣れてきた頃——ふいに、

日向の親指がクリトリスに触れた。くりゅ……くりゅ……と親指で円を描くようにこねくり回した。

「ひあぁっ♡♡♡んぐぅ……ひう……クリ、またぁ……っ♡♡」

「……クリを指でこねくり回すと中がぎゅって締まる」

「ら、らってえっ……♡♡」

ぬちぬちぬちぬち♡♡ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ♡♡
くりっ♡♡くりくり♡♡くりゅくりゅ♡♡

「……っ♡♡ひ、い……ぐっ♡♡んあぁあぁ……ッ♡♡♡♡」

舌が中を掻き回すのと、指がクリをいじるのと——二箇所同時の刺激が、脳を直接揺さぶってくる。あまりの刺激の強さに、抑えつけられた膝が我慢できずにガクガクと震え出す。

「んおぉ……♡♡♡んぐぅ、あぁ……ひい……♡♡♡」

与えられる刺激が多すぎて、快感の波が途切れない。休まる瞬間がなく、ずっとどこかが気持ちいい状態が続いている。

「ひあっ♡♡ お、お、んぐっ！！♡♡ らめらめええ~~~~~……それ、やらあ……あ、あだま、おかしく……っ♡♡」

「……ん。いつも世話してくれるあんたが、俺の舌と指でおかしくなってるの……すっげえ興奮する」

（なんでえ……！？ 私、なんで、日向とこんなことに……！？♡）

恋人でもないのに、こんなのダメだ。日向を止めなきゃ。頭ではそう思うのに、体が快楽に支配されて気持ちよくなることしか考えられなくなってくる。

くりゅ……かりかり……かりかり……♡♡

「んあぁあ！？♡♡♡」

日向の指の動きが変わった。くるくる回していたのが、皮を押し

上げてむき出しにした芯の部分をやさしく爪で引っ掻き始めたのだ。
抗いがたい痺れが脳髓に走って、ビクンと大きく跳ねる。

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡♡♡かりかりっ♡♡♡

「ひぁ、あつ、あぁあ~~~~~……♡♡♡カリカリ、は、らめっ♡
♡♡♡いぐ、いぐ、いぐううう……ッ♡♡♡」

びくつびくつと痙攣しながら、絶頂する。経験したことのない快
楽の連続に、涙を流しながら逃れようとするけれど、日向はそうは
させまいと私の太ももに腕を回してがっちりホールドしている。

イっている最中に、舌が中の浅いところをぐちゅぐちゅと抉りな
がら、指はむき出しの先端をぐりぐりと押し潰すせいで、のぼり詰
めたまま、戻って来れない。

「んおほおおおお!!?♡♡♡いっで、いっでるう、も、やらあ
……♡♡♡ひぐっ♡♡♡おっおっおっ……あぁあ~~~~~ッッッ!?

♡♡♡」

じゅわあああ……♡♡♡

「……んー、なんかいっぱい出てきた……」

れろれろお……じゅるじゅるう……♡♡♡

溢れてきた蜜を啜りながら、指の速度を上げてくる。先端をきゅつきゅつと親指で弾いて、こねて、押して、また弾いて。

ぬちぬちぬちぬちぬちぬちぬち♡♡♡

かりかり♡♡♡くりゅくりゅくりゅう♡♡♡

「あああつ！！？♡♡♡いっ、ぐう~~~~ツツ♡♡♡ イグイグ

イグ~~~~ツツ♡♡♡」

びくん♡♡♡びくびく♡♡♡

押さえつけられた体勢のまま、腰だけをビクビク跳ねさせて達してしまった。

「ん…………♡♡♡」

絶頂の余韻で中から蜜がとろとろ溢れてるのを、日向がまだ舌で舐めとっている。

「はあっ…………はあ…………っ」

「…………イキ顔…………かわいすぎ…………」

「…………うー…………」

「…………あと、目ぎゅってして、口開いて、全身びくってして…………
かわいい」

「…………かわいい要素どこにもない…………」

こんなに、心の底から気持ち良さに喘いだことなど生まれて一度もなかった。きつと、今の私は化粧も落ちてひどい顔をしているにちがいない。

「…………もっと…………したい」

「……は？」

「……足りない」

「え……無理、ほんとに無理……っ」

日向がまだ舐め続けようとするのを、必死で押し返した。

「ま、待って……死ぬ……っ」

「……死なない」

「死ぬってば……」

ようやく顔を上げた日向の口元が、てらてらに濡れていた。それを手の甲で拭いもせず、無表情のままじっと私を見てる。

「……まだ舐めたい」

「……いや、だから……無理だって……」

「なんで？」

「なんでって……どんだけ舐めれば気が済むの……!？」

「……そんなのわかんない」

わからないって言いながら、日向の目がギラギラ光ってる。無表情のくせに、瞳の奥だけが飢えた獣みたいで。

（……こ、このままじゃ、ほんとに殺される……!）

もう一度日向の手が伸びてくる前に、私はソファから転がり落ちるようにして逃げた。

「っ——」

膝がガクガクで、まともに立てない。四つん這いで、とにかくこのヤバい男から距離を取ろうとした。

「……どこ行くの」

背後から、淡々とした声。焦りも怒りもない。ただ純粹に不思議そうな声。

「に、逃げるに決まって——」

足首を掴まれた。

「ひゃっ——」

ずるつと引き戻される。カーペットの上を滑って、一瞬で日向の手の届く距離に。

「やだっ、離して——！」

「……逃げなくていい」

「逃げるに……決まってるでしょ……！もう無理なの……っ！」

「……大丈夫。もっと気持ちよくなるから」

（……もうこれ以上気持ちよくなりたくないから逃げてんのに……
！）

四つん這いの体勢のまま、後ろから腰をがっしり掴まれた。両手で、逃がさないように。

「ちよっ——」

「……もっとお尻突き上げて」

「何言って……ひあっ！？♡♡」

後ろから顔を埋められた。四つん這いの姿勢で、背後から、秘部に舌を這わされる。

れろお……れろお……♡♡♡

「やっ♡♡勝手に舐めないでよお……っ♡♡」

「……お尻……柔らかい……」

舌で秘部全体を舐め尽くされ、更にはお尻をもにゅもにゅと揉みしだかれて、またお腹の奥に熱が灯ってくる。

「んう~~~~……っ♡♡やめてって言うてるのに……♡♡♡」

後ろからだど、舌の当たる角度がさっきと全然違う。正面から舐められてた時とは別の角度から、舌先がぬるりと触れる。

「ああっ♡♡そこ、やらあ……さっきと……ちが……」